

祖父から孫へ、「愛」のバトンリレー

—地域に根差した耕畜連携・循環型農業の実現—

株式会社イソシンファーム（肉用牛肥育経営・栃木県大田原市）

地域の概況

㈱イソシンファームが所在する大田原市は、那須野が原の扇状地に位置し、内陸性の気候に属する。市の中央を鮎の漁獲量日本一の清流・那珂川が流れ、市の東側は八溝山系山間部からの雪解け水が豊かな水源となっている。

大田原市の農業産出額は260億円と県内で



(写真1) 右から社長の平久江利実さん、会長の磯進さん、取締役の平久江由美子さん

(表1) 経営の推移

年次	作目構成	飼養頭数	飼料作付面積	経営・活動の内容
昭和45年	肉用牛肥育 (ホワイトヴィール)	子牛50頭		27歳で独立
昭和46年	肉用牛肥育 稲作	50頭		石油危機により原材料枯渇・高騰 ミルクの代替として自己調達 の草を給与→循環型農業の 基本形へ
平成18年	肉用牛肥育(交雑種) 稲作・アスパラガス	300頭		循環型農業の実現に向け、 堆肥有効活用の観点から アスパラガス栽培開始(0.3ha)
平成22年	肉用牛肥育 (交雑種・ホルスタイン) 稲作・WCS・アスパラガス	380頭	WCS 10ha	将来の事業承継を見据え法人化 利実さん(現社長)が就農
平成25年	肉用牛肥育 (交雑種・ホルスタイン) 稲作・WCS・アスパラガス	400頭	WCS 30ha	廃業した肉牛農家から羽田農場(6ha)購入
平成28年	肉用牛肥育 (交雑種・ホルスタイン) 稲作・WCS・アスパラガス	550頭	WCS 50ha	廃業した大規模農場(栃木県大田原市、20,177坪)を取得
令和4年	肉用牛肥育 (交雑種・ホルスタイン) 稲作・WCS・アスパラガス	950頭	飼料用米10ha WCS 80ha	利実社長に経営移譲
令和6年	肉用牛肥育 (交雑種・ホルスタイン・ 黒毛和種) 稲作・WCS・アスパラガス	950頭	飼料用米10ha WCS 80ha	和牛の肥育を開始(月2頭のペースで導入)

も有数の規模だが、中でも水稲は県内第1位の生産量を誇る。畜産関係では上質の和牛や乳牛の飼育が盛んである。

経営・活動の推移

初代社長である磯進氏（現会長）は、16歳で親元就農し、当時は稲作を営んでいたが、親元から独立するにあたり肉用牛の肥育に着目し、昭和45年（当時27歳）に購入した肉用牛の子牛に代用乳のみを給与しホワイトヴィールとして子牛の肉を出荷する経営を開始した。

しかし、オイルショックの影響を受け代用乳の高騰や代用乳自体が市場に十分量出回らなくなったことにより、自給飼料を活用した肥育経営に切り替えることとなった。また、肉用牛の肥育とともに稲作も行っており、肉用牛飼養により得られる堆肥を水田に還元、代わりに米収穫後に得られる稲わらを飼料に、もみ殻を敷料に活用しながら徐々に頭数を増やしてきた。

平成22年には平久江利実氏（現社長）が就農し、将来的に事業継承することを考え法人化し、現在の㈱イソシンファームを設立した。

平成25年3月に廃業した肉牛農家から農場および農地を購入する（6ha）とともに、平成28年には廃業した大規模農場（栃木県大田原市、2万177坪）を購入するなど規模拡大を進めてきた。

経営・技術の特色等

【高い粗飼料自給率】

肥育牛に与える粗飼料は、育成当初に輸入乾牧草を与えるが、育成3か月を経過した後はWCSの給与、肥育後期は稲わらを食べ

（表2）経営実績（令和5年）

経営の概要	労働力員数 (畜産・2000hr換算)		家族・構成員	0.0人	
			雇用・従業員	8.0人	
	飼料生産	実面積		900a	
	肥育牛 平均 飼養頭数	肉用種			0.0頭
		交雑種			845頭
	年間 肥育牛 販売頭数	乳用種			140頭
肉用種				0頭	
交雑種				387頭	
収益性			乳用種	80頭	
	所得率			10.0%	
出荷肥育牛1頭当たり生産費用			922,206円		
生産性	肥育 (品種・肥育タイプ)	肥育開始時	日齢(月齢)	40日	
			体重	60kg	
		肥育牛 1頭当たり	出荷時	859日	
			出荷時生体重	800kg	
		平均肥育日数		819日	
		販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)		0.903kg	
		対常時頭数事故率		2.4%	
		販売肉牛1頭当たり販売価格		715,233円	
		販売肉牛生体1kg当たり販売価格		894円	
	肉質等級3以上格付率		72.0%		
	もと牛1頭当たり導入価格		169,615円		
	もと牛生体1kg当たり導入価格		2,826円		
	肥育 (品種・肥育タイプ)	肥育開始時	日齢(月齢)	40日	
			体重	70kg	
		肥育牛 1頭当たり	出荷時	682日	
			出荷時生体重	842kg	
		平均肥育日数		642日	
		販売肥育牛1頭1日当たり増体重(DG)		1.202kg	
対常時頭数事故率		2.4%			
販売肉牛1頭当たり販売価格		617,293円			
販売肉牛生体1kg当たり販売価格		733円			
肉質等級3以上格付率		1.0%			
もと牛1頭当たり導入価格		132,052円			
もと牛生体1kg当たり導入価格		1,894円			

せ、粗飼料自給率は約95%となっている。

粗飼料となるWCSは、地域の農家からの受託も含めると81ha栽培している。濃厚飼料となる飼料用米も10.5ha栽培しており、出荷牛1頭当たり購入飼料費は48万4,000円と低コスト化が図られている。生産したWCSは、



(写真2) WCS専用収穫機での刈り取り

自家消費のほか、地域の酪農家へも供給しており、地域一帯で耕畜連携を図っている。

また、濃厚飼料としてトウモロコシの代わりに飼料用米を平成22年から給与し、平成27年より利用率を10%から20%に高めるなど新たな取り組みについて、意欲的に行っている。

【耕畜連携による循環型農業の実践】

自家生産の堆肥の利活用のため、地域の耕種農家34戸との耕畜連携（堆肥と稲わら交換）および自社農場で取り扱っている水田に堆肥散布を行っている（堆肥散布105ha）。また、耕種農家だけではなく近隣の果樹農家や家庭菜園など利用希望のある方すべてに堆肥を提供している。耕畜連携により堆肥を有効活用でき、また、いただいた稲わらは牛の飼料となるため、飼料コストの低減につながっている。



(写真3) 堆肥散布



(写真4) WCSの給与

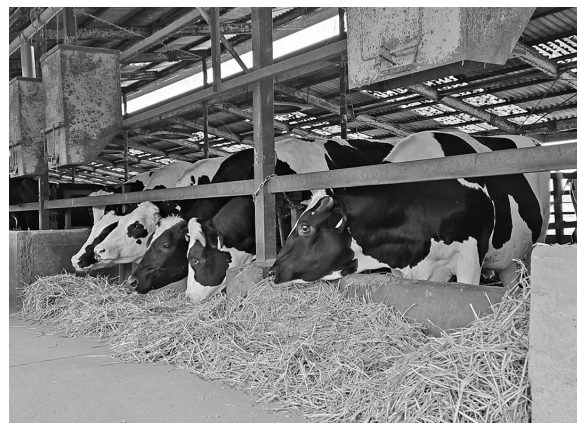
【アスパラガス栽培との複合経営】

堆肥を多く利用し土づくりをするということから、平成18年よりアスパラガスの栽培を始めた。一部を直接販売するなどの販路拡大やスーパーと連携した消費者交流会を実施するなど「食と農」の重要性のアピールも行い、環境保全の取り組み等と合わせて「安心安全な農畜産物の生産・資源循環型農業」を消費者視点も踏まえながら実践している。

【安心安全な牛肉生産への取り組み】

生活協同組合へ「栃木開拓牛（ホルスタイン雄）」、「ほうきね牛（交雑）」として販売しており、所属している栃木県開拓農業協同組合と那須簞根酪農業協同組合による地域内乳肉一貫生産を実施している。

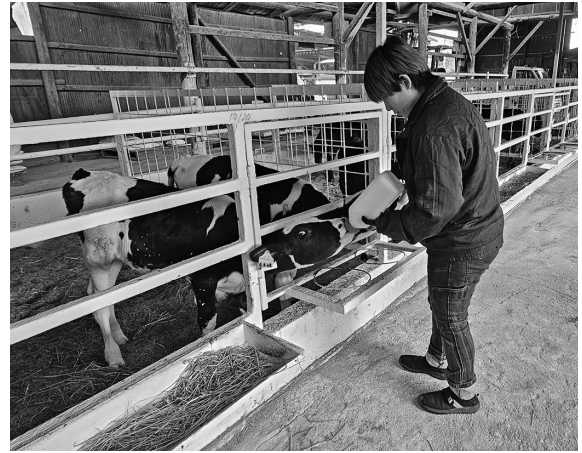
生産される牛肉は、生まれてからと畜され



(写真5) 豊富な稲わら



(写真6) ハッチの石灰塗布



(写真7) 哺育の様子

るまで飼養状況を把握できる状態を維持し、生産履歴と生産情報が開示されている。また、NON-GMO穀物飼料、自家生産の稲わらやWCSを利用し、牛の健康的な飼育を実施している。さらに、独自に牛肉の放射性物質検査も実施しており、国の基準値である100Bq/kgの1/10である10Bq/kgを検出下限値として設定し、牛肉は検出下限値未満になっている。

【健康に育てるための哺育技術と肥育技術】

牛も「苗半作」という言葉と同様に、良い子牛を育てること、つまり哺育期の管理が後々の肥育牛の成績に大きく関わっているという考えを持っている。そのため、スモール（生後1か月齢未満）で導入した子牛もしっかり代用乳が飲めるように、観察・工夫をしながら成長を確認している。子牛の時期にしっかりと（1日4ℓ）代用乳を飲ませ（2か月齢で断乳）、また、柔らかな乾牧草を給与することで、成長に必要な栄養の摂取と十分なフレーム作り・腹づくりを促している。

また、導入直後の子牛を入れるハッチは子牛を入れる前までにきれいに掃除し、石灰塗布をすることで、病気の侵入防止やまん延防止に力を入れている。さらに、朝の作業前や餌の給与後などの牛が落ち着いているタイミングでの巡回を頻繁に行っている。巡回で気

がついた些細なことでも従業員の間で共有することにより、調子の悪い牛を早期に発見・対応することを心掛けている。

上記の取り組みなどにより、過去3年間で事故の割合は、対常時頭数事故率2.4%と低くなっている。

【先進機器の導入】

利実社長はドローン免許を取得し、水田への薬剤散布を効率的に行っている。また、GPSを活用した田植え機も導入しており、従業員の労働時間短縮と労働標準化に寄与している。

WCSの収穫機器は、本格的に栽培を開始した平成21年に細断型専用収穫機を購入しており、当時から効率的な作業と良好な品質のWCSの生産を目標に行ってきた。



(写真8) ドローンによる薬剤散布

地域に対する貢献

【農地の維持管理】

離農や後継者不足・高齢化により農地の利用に課題を抱える農家に対し、作業受託や農地の買い取りなどを行っている。地域農業の維持が重要であると考え、地域からの依頼は可能な限り引き受けている。

【堆肥供給や耕畜連携等による地域農業との共生への取り組み】

堆肥は2か月に一度のペースで切り返しを行うとともに脱臭剤の使用によって臭いの発生を抑制している。また、もみ殻堆肥で使用しやすいことから計50戸の農家に無償で配布している。肥料高が続く昨今において、近隣農家のコスト低減に貢献している。

また、粗飼料のWCS (2,148t)、飼料用米 (65t) を生産していることから、耕種農家・畜産農家との利用計画や堆肥散布契約などを通して、離農・後継者不足・高齢化といった課題を抱える近隣農家に対し、地域の中核的な農家としての位置を確立している。

【食育の活動】

那須野農業協同組合の「なっちゃんくらぶ」の一環で、年に一度アスパラガスの収穫体験を実施している。また、特約販売先である生活クラブの交流会・産地説明会や、「まるご



(写真9) 消費者との交流

と栃木」のイベントなどを通して定期的に消費者団体との交流を図っている。

女性の活躍・働きやすい 職場環境づくりの取り組み

現在、役員3名のうち2名は女性である。利実社長は肉牛部門の責任者、進会長は水稲部門、由美子取締役はアスパラガス部門の責任者として経営を行っており、分業体制が確立している。

従業員13名のうち6名は女性であり、男女問わず作業に従事している。業務を行う上で必要な資格の取得については会社で費用を負担しており、社員のスキルアップに向けた積極的なサポートを行っている。

事前に休みの希望を聞いた上で利実社長がシフトを組んでおり、希望休は100%取得可能となっている。農閑期には毎年研修生も含め貸切バスで社員旅行に行っており、従業員のモチベーション向上に寄与している。また、研修生の住環境整備についても力を入れて取り組んでおり、男性用宿舎とは別に女性用宿



(写真10) 研修生の宿舎



(写真11) 社員旅行



(写真12) 定期的に行う食事会

舎を設置している。

将来の方向性

【次世代への継承】

利実社長は会長の孫娘、由美子取締役は会長の娘であり、家族内での経営の継承が着実に行われている。なお、利実社長は32歳と若く農家の高齢化が進んでいる中、地域の担い手として期待されている。

令和5年度には、関係機関が連携し「担い手コンサルティング」を実施し、進会長が引退した後も経営規模を維持できるようコンサルティングを受けており、令和10年度を目安に実質的な事業承継、「バトンリレー」の完了を目指している。

【今後の事業継承】

事業承継完了までは現状の売上高4億7,500万円、飼養頭数988頭、経常利益率8%の維

持を目指し、経営の安定化に重きを置いている。将来的には、規模拡大も視野に入れるとともにICT技術の導入による作業効率化の推進など、設備面でのさらなる充実を図っていく予定である。また、引き続き耕畜連携による循環型農業の実践によって、消費者に安心安全な牛肉を供給するとともに、近隣農家の作業受託や農地取得を通して地域農業の下支えに努めていきたい。

さらに、在籍していた従業員が技術を取得した後に自ら経営者として畜産業を営んでいることから、利実社長は「農業を学べる場としての役割を当社が担っていけたら良いと考えている。実践型の研修を行うことで地域の担い手になる人を育てていきたい」と考えている。牛、従業員、地域を愛する進会長の思いを引き継ぎ、これからも地域に貢献しながら、「創造」と「前進」を目指していく。